

平成22年度伊川津貝塚調査の概要

田原市教育委員会 文化財課

20100708

1 調査の経緯

伊川津貝塚は、田原市伊川津町郷中に所在する。伊川津集落の中にあり、神明社境内を中心として、南北60m東西180mに広がる、吉胡貝塚、保美貝塚と並び縄文時代後期晩期中心の、渥美半島を代表する貝塚遺跡である。

平成20年度から農業集落排水工事による下水道管敷設に伴い、調査を行っている。本年度は、管路の延長70m、マンホール5箇所の調査を行った。調査対象面積85㎡である。場所は貝塚の中心である伊川津漁協から国道259号線までの道路で、貝塚を南北のトレンチ調査を行う格好である。貝塚の北端の検出、また貝塚を含む墓域の範囲を知るうえで重要な調査である。期間は平成22年11月8日～翌年1月25日である。

貝層は、層を認識したうえで、深さ5cmずつで掘り下げ、遺物を取り上げた。調査時の遺物採集エラーを防ぐために、掘りあげた層を現場で4mmの篩がけをし、遺物を悉皆採集した。なお、貝については貝種の記録にとどめた。植物遺体については、現場での採取は行っていない。炭化材(物)のみの採取である。

2 成果の概要

(1) 縄文時代

縄文時代の貝層は、調査区の南側に堆積し、晩期前葉の貝層はより南に集中し、晩期後葉の貝層がその上を覆い、北方面にも伸びている。一部、離れて国道から北側にも存在するが、小規模である。また、縄文時代以降から幾度となく地業され、貝塚のもともとのマウンドも削られ、現在のようにみかけ平坦な場所へと変遷しているようである。とくに近世から現代の造成は著しく、時に縄文時代の貝層と認識し調査をした下層から、近代の遺物を含む地層が出現する場合もある。

貝層以外の遺構は、人骨の埋葬5例、埋葬イヌ8例以上、土器棺8基、焼土面が2か所(石組みを伴うものもあり)、土坑、ピットが多数検出された。ヒト・イヌの散乱骨もあり、調査区内にはさらに多くの埋葬がおこなわれていた可能性がある。石組みを伴う焼土(炉と呼んでよいか?)は、2008年度調査においても検出しており、1992年調査では、石組炉を伴う竪穴住居が検出されている。

埋葬遺構 埋葬遺構で注目されるのは、12号マンホールでの土器棺、埋葬人骨の集中である。まず、土器棺4、土器棺2が埋設された(どちらが先行するかは不明)のち、両土器棺を破壊して5号人骨が埋葬される。そののち、1号人骨がその上部に埋葬され、1号土器棺が埋設される。下位の2号・4号土器棺は、五貫森式でも古段階、最上位の1号土器棺は新段階である。

5号人骨に伴う遺物も注目される。加齢が進んだ極めて頑丈な成年の男性で、頭を北西に向けた仰臥伸展葬である。左の橈骨が存在しなかった。手根骨をはじめ接する他の骨がまったく乱れておらず、極めていい骨を外した(失われた)印象を受ける。左胸には叉状角器、頭部左に接し彫刻と穿孔を施した棒状角器を伴っている。また下肢には基部が折れた磨製石斧が見ついている。ただし叉状角器が見つかった左胸の肋骨が乱れていること、胸骨が存在しないことは注意を要する。

4号人骨は12号マンホールの北端に位置し、頭を南に向け、仰臥し両腕曲げ胸にかざした成年女性

、そして土器棺3号（いわゆる保美型深鉢）の口縁部が顔面部分に接した状態で発見された。また土器棺、女性の下半身に接した状態で、子供の骨が検出された。残念なことに、崩壊する寸前に採取だけを行ったため、埋葬状態の詳細な確認は不可能であった。また女性にはあたかも首周辺にマフラーを捲いたが如く、赤彩が確認できた。

土器棺には、7基中、確実に5基に人骨が確認できた。すべて胎児から乳児クラスのものである。墓は、貝層の縁辺に集中する傾向があり、注目すべきところである。

遺物 縄文土器(晩期前葉から後半中心)、土偶破片、石器（石鏃・ドリル、スクレーパー、叩石、磨石類、打製・磨製石斧）、骨角器（ヤス・根バサミ・ヘラ・鏃・釣針等）、貝器（貝刃、貝製腕輪、穿孔品・弓はず）装飾品（牙・鹿角・サメ椎骨製玉）等が見つかっている。石器では石鏃が最も多い。4割ほどが有茎鏃で、石材はチャートが多く5割を占め、サヌカイトが2割ほどの比率である。石棒類は少ない。骨角・貝器類は渥美半島の縄文時代に普通に見つかるヤス、根バサミが少なく、貝輪（ベンケイガイ製）が多い。また、2008年調査で大量に検出されたチョウセンハマグリ製の加工品もほとんどない。

動物遺体 貝は、オニアサリ・アサリを主体とし、スガイ・レイシ・アカニシ・ハマグリなど内湾の干潟・岩礁・湾口・外洋に至るまで、多種の貝で構成される（ミルクイ、イボニシ、オオノガイ、ウチムラサキ、シオフキ、ヤマトシジミ、ツメタガイ、ウミニナ、ダンベイキサゴ）。獣骨は、シカ、イノシシが主体で、海獣、両生類、小型の獣、鳥もある。魚骨は、現場採取ではフグ・タイ・スズキが目立つが、まだ水洗を行っていない状態なので小型の魚類は不明である。

（2）弥生時代

晩期から続く条痕文期の遺物がみつかるが、引き続き貝層・墓域の形成が行われていたか本調査区からは積極的に評価できない。今後の精査が必要である。中期以降の現在のところ未確認である。

（3）古墳・古代時代以降

調査区の北側から竪穴式住居6棟が検出された。この6棟は複雑に切りあっており、調査区の形状や面積が少ないため規模を推定するにいたらない。すべての住居跡に時期を特定する須恵器・土師器が出土していないので、隣接した1992年度（駐在所）のあり方と同様に7世紀末から8世紀と考えられる。うち1棟からは、金銅製耳環が検出された。耳環は国道の調査区からも1個検出されている。

（5）その他の時期

石組の井戸、南北に走る溝等が検出された。時期は不明であるが、少なくとも中世以降のものと考えられる。中世以降の遺物も出土するものの、遺物の断面もシャープでなく、プライマリーな状態ではない。遺物を伴わない、縄文期の貝層に掘り込まれたピットもなども存在するが、遺構や場の性格を現すような明確な遺構がない。

3 まとめ

今回の調査で、伊川津貝塚の縄文時代の貝層の端、墓域の広がりを確認することができた。また、古代の集落の広がりも確認できた。伊川津集落が立地する砂礫堆の生活は各時代に長く及んでいたことがわかった。

92年の調査区の縄文時代晩期後半を中心とした墓域縄文時代の貝層は道路下であったため、水道等の破壊以外よく保存されており、各層に含まれる遺物の分析により東海地方の基準となる好資料となる。

2008 年度調査は、後期末から晩期前葉、2009 年度は晩期末、2010 年度晩期前葉から後半、と調査区で貝層、遺物の時期が異なる。また遺物のあり方の異なる状況は、時期の違い、伊川津貝塚の特徴を示していると思われる。しかし、遺物はかく乱層のものも含むだけでなく、出土状態からの時期等も検討もない現段階の内容であるので、今後詳細な分析が必要で、時期別の伊川津貝塚の様相が明らかになるに違いない。

	地区	性別	年齢	埋葬姿勢	頭位	伴う遺物等
1号	11QR	男	少年	側臥屈葬	北東	墓坑内?に磨製石斧 抜歯2C系
2号	12マ	?	乳児	伏臥伸展葬	北	墓坑内に磨製石斧
3号	12A	女	成人	仰臥伸展葬?	北東	胸部に赤彩 墓坑内に磨製石斧 抜歯4I系
4号	12マ	女	成人	仰臥下半身不明	南東	子供と合葬 頭部に赤彩 抜歯4I系 土器棺3号を上部に置く。 抜歯4I系
		?	子供	?	?	
5号	12マ 11R・Q	男	成人	仰臥伸展葬	北西	1号人骨の下に埋葬 土器棺2を切る 胸に又状角器 頭部に近接して彫刻のある棒状角器 脚部に磨製石斧 左橈骨のみなし 晩期後葉(五貫森) 抜歯2C系

表1 埋葬人骨一覧

	地区	器種	時期	埋設方法	人骨の有無	備考
1号	11R	壺	五貫森	斜～横位(底部なし)	あり。	
2号	12マ	深鉢(刻目突帯文)	五貫森	立位	あり。	赤彩
3号	12マ	深鉢(保美型)	五貫森	口縁南南西	あり。	
4号	11R	深鉢(突帯文)	五貫森	北西横位	検討中。	3号人骨と同時埋設
5号	13B	深鉢(砲弾型)	晩期後半	横位 南東	あり。	
6号	16マ	壺	晩期後半	立位 破片を被せる?	なし。	埋設土器ではない?
7号	14マ	蓋・深鉢(素文突帯文) 身・深鉢(刻目突帯文)	五貫森	横位。南西別の個体の深鉢頭部～ 口縁部破片を口縁部周辺に被せる	あり。	

表2 土器棺一覧

	地区	層位	備考
1号	11E	貝層中	頭は東方向 側臥
2号	11I・J	貝層中	頭は北西方向 側
3号	11K	貝層下	四肢骨下あご、椎骨が不規則に
4号	11I	貝層中	断面にあらわれた
5号	11L・M	造成土中	造成土の貝層に一括に含まれていた
6号	11O	貝層中	腹部がピットで攪乱
7号	11M・N	貝層下	頭、四肢骨あるも乱れている
8号	11O	貝層中に埋葬	壁東

表3 埋葬イヌ

